論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	市川　享子

論文審査担当者	主　査	政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部教授	大江　守之
	副　査	政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部教授	宮垣　　元
		政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部准教授	長谷部葉子
		筑波大学人間系教育学域准教授		唐木　清志
学力確認担当者：				

（論文審査の要旨）

市川享子君の学位請求論文は『大学と地域の協働による循環型学習』と題し、4 章より構成される。

市川享子君がボランティアセンターのコーディネーターとして勤務する大学は、東日本大震災発生直後から学生たちが開始した自発的なボランティア活動を支援する決定を行い、これを受けて、市川君は今日まで約 6 年間にわたって続いている学生ボランティア活動のコーディネートに様々な形で関わってきた。岩手県Ｂ町Ｃ地区に拠点をおいて継続的に行われてきたボランティア活動は、被災直後の混乱期を過ぎる夏頃から 5 つのプロジェクトに収斂していき、このうち 2 つは約 3 年で収束を迎えたが、残り 3 つは今日まで続いている。このなかで、坦々と進んできた中学生への学習支援以外の 2 つのプロジェクト、すなわち、小学生を対象とした遊び場を運営する「子ども支援」と流出した方言辞典を復刻するための「アーカイブ作成」は、それぞれ異なる形ではあるが展開をみせ、学生たちが活き活きと行動し、前者の当事者である子ども、後者の中心的当事者である高齢者に受け容れられてきた。

市川享子君は、この 2 つのプロジェクトが同じように長期にわたって継続し、同じように多くの学生が関わってきたにもかかわらず、アーカイブ作成の方が学生たちの気づきと行動によって、当初想定していなかった展開を見せているのに対し、子ども支援はそうした広がりをもたないのは何故かという研究的関心を持つようになった。そして、このメカニズムを明らかにできれば、地域社会への貢献と学生の深い学びを実現するボランティア学習あるいはサービス・ラーニングのプログラム開発に応用できるのではないかと考えた。市川君は実践者から実践的研究者へと進もうと 2010 年秋に後期博士課程に社会人入学した半年後から、東日本大震災復興支援プロジェクトに全面的に関わるようになり、その過程でこうした研究関心と展望を持つようになったことから、『大学と地域の協働による循環型学習』をテーマとして研究に取り組むことになった。

第 1 章では、研究の背景と目的について述べた上で、既往研究のレビューを行い、本研究の位置づけを行っている。社会からの要請と学生の主体的な学びの実現の双方から「社会参画する大学」が求められており、それに応える形でボランティア・センターやサービス・ラーニング・センターが全国の大学につくられてきている。ここで実践されているボランティア学習やサービス・ラーニングは、その過程で行うリフレクションが重要であると認識されており、当該分野におけるこれまでの研究は、リフレクションによって学生個人の内面的成長がどのように進んだかという評価に重きを置いてきた。本研究は、学生と地域の当事者がどのように地域社会の問題を発見し、問題解決につながる状況を導いたかを「創造的リフレクション」という概念を用いて論じ、それが生成される「場」の構造を解明し、地域の発展と学生の主体的な学びの好循環を生み出すプログラム開発に必要な知見を明らかにすることを目的とした。

第２章では研究対象と方法を示した。研究対象としたのは、東日本大震災で被災したＢ町Ｃ地区におけるＡ大学の学生による復興支援活動である。Ａ大学による復興支援活動は、災害ボランティアセンターや NPO といった団体に学生を送り出して一方向的に支援するのではなく、地域に直接関与しながら復興過程に継続的に関わるもので、今日まで約 6 年にわたる長期的なものである。本研究では継続して取り組まれ

論文審査の要旨及び担当者

た 5 つのプロジェクトのうち、テーマとしての一貫性を持ちつつも学生のリフレクションによって活動が展開した「子ども支援」、「アーカイブ作成」の２事例を選定した。また研究方法としては、公表された記録と活動に参加した学生からのインタビューを主に用いた。これは、市川君が最初からこの活動を研究対象とすることを想定して関わってきたものではなかったことから、研究倫理上の制約から利用できる資料が限定されたためである。この活動に長く関わるうちに、深いリフレクションがどういう条件のもとで起こるのかを明らかにしたいと考えるようになったことが研究の動機であるが、事後的にデータを揃える困難性を伴うものとなった。なお、学生たちのリフレクション記録を読むことは大学から許可されていたため、これらには全て目を通した上で、対象学生と調査項目を絞り込んでインタビューは実施した。

第 3 章では、「子ども支援」と「アーカイブ作成」を対象として、「創造的リフレクション」の生成過程を分析している。まず、これまでのリフレクション研究を踏まえて、「創造的リフレクション」を「大学ボランティアセンター、学生、地域内の責任主体が『場』の形成に関与し、その『場』において、当事者の潜在的なニーズの発見を支援し、同時にその充足に向けて枠組みを提示し関与することを目指して行うリフレクション」と定義し、それが PDSA（Plan-Do-Study-Act：計画 -活動 -考察 -再構成）というサイクルの中で行われるという仮説を提示した。さらに一つのニーズをめぐってサイクルが回り、ニーズが明確化していくプロセスを「フェーズ」と呼び、ニーズが明確化され充足されてフェーズが収束する段階で新たなニーズが見いだされ、新たなフェーズが立ち上がることを「フェーズ転換」と呼ぶと、長期にわたる参与観察から、創造的リフレクションは「フェーズの転換」という構想力が必要なプロセスでこそ、その姿を鮮明にするという仮説を考えることができる。「子ども支援」では、一つのフェーズのなかで小さな転換がいろいろな形で起き、 フェーズが深まりをみせ、それを基盤にして派生的なフェーズが生じたことが明らかになった。一方、「アーカイブ作成」は方言辞典を復刻するための言葉の収集から始まったが、その過程で地域社会の関係性が分断されている状態を修復したいという様々な当事者のニーズが発見され、それを充足するツールとしての「方言カルタ」の制作に進むというような明確なフェーズ転換が複数回起きたことが明らかになった。

第 4 章では、2 つの活動のフェーズ転換の違いを生み出しているものは『場』の形成のされ方の違いにあるのではないかと考え、その違いを明らかにするとともに、地域の発展と学生の主体的な学びの好循環を生み出すプログラム開発に必要な知見を提示した。『場』の概念は佐藤・諏訪によって整理されているが、本研究ではそれを拡張し、「一定の共同性を有する地域社会を背景にもち、公的性格を有する地域内の組織（責任主体）と大学ボランティアセンターが見守るなかで、当事者のニーズの明確化と充足を支援する学生ボランティア活動が展開できるように形成（設定）された活動領域」と定義した。そして、『場』は「一定の共同性を有する地域社会」という第１層の上に成立する第２層という構造になっており、フェーズは『場』のなかに成立する第 3 層であるというように、3 層構造のなかに『場』を位置づけると、以下の点が明確になる。すなわち、創造的リフレクションが有効に機能する『場』とは、制度と結びついた地域の責任主体の関与が小さく、地域社会の共同性との距離が近い、柔軟性の高い『場』である、ということである。さらに、Bradshaw の社会的ニーズ論における「ノーマティブニーズ」と「フェルトニーズ」の概念を援用すれば、この柔軟性が高い『場』では、制度的制約から自由ではないノーマティブニーズではなく、フェルトニーズという真に人々が望むニーズに触れることが可能であり、それゆえに創造的リフレクションが触発されやすいと考えることができる。以上の知見をふまえて、循環型学習がよりよく機能する『場』は、当事者ニーズが学生と地域の当事者との相互作用・交渉の産物として発見・充足されるという構造を持つことから、できるだけ制度的な枠組みを超えて、地域社会の共同性に近いところに設定されていく必要があると結論づけた。

第３章、第４章の研究成果は、日本福祉教育・ボランティア学習学会機関誌に２本の原著論文として採録され、独自性のある新たな知見を提示した研究として認知された。その 2 本の論文を軸に再構成された本学位請求論文は、学生をボランティアとして地域に送り出す際の『場』の設定に際して実践的知見を提供するものであり、この知見がないなかで学生を送り出す場合と比較して、学習効果と地域社会貢献に明確な見通しもつことができるようになった。ただし、本研究における理論構築と実証分析はともに粗削りであり、得られた知見は今後の実践のなかで批判的に吟味され、拡張・修正・更新がなされていくことに

論文審査の要旨及び担当者

なろう。しかしながら、その起点を創り出したという点で本研究の成果は学術的価値を有していると言える。

以上のように、市川享子君の論文は、自立した実践的研究者としてボランティア学習、サービス・ラーニング研究を進めていくために必要な能力ならびにその基礎となる学識を有していることを示している。よって、本学位審査委員会は市川享子君が博士（学術）の学位を授与される資格があるものと認める。